「何百万人に憎まれている」 ロシア国民と中国は、なぜゴルバチョフが嫌いなのか

2022年09月01日（木）20時27分

訪米したゴルバチョフ氏（1987年）　Gary Hershorn-Reuters

＜死去したゴルバチョフ元大統領はロシアで多くの国民に憎まれ、中国からも「重大な過ちを犯した」と非難されるようになった＞

［ロンドン発］ソ連末期に「ペレストロイカ（改革）」を推進、冷戦を終わらせノーベル平和賞を受賞したミハイル・ゴルバチョフ元ソ連大統領が8月30日、入院先のモスクワ市内の病院で死去した。91歳だった。その功績は米欧では高く評価されたが、ロシアでは「20世紀最大の地政学的大惨事」（ウラジーミル・プーチン露大統領）とソ連崩壊の責任を問われた。

ソ連崩壊から20年が経った2011年、元ソ連大統領副報道官アレクサンダー・リコタル氏は筆者に「1985年、ソ連には4万台のコンピューターしかなかったが、米国には400万台もあった。ソ連製品の92%は国際競争力を失っていた。ソ連を崩壊に導いたのはゴルバチョフ氏でもボリス・エリツィン元ロシア大統領でもなく、自然の帰結だった」と振り返った。

「ゴルバチョフ氏は市場の意味が分かっていなかった。成熟した市場が存在していればソ連を維持できただろう。彼は89年までに共産主義体制を壊して新しい体制を構築しなければならないと認識していたが、ソ連が崩壊するとは一度たりとも思ったことはなかった。ペレストロイカは潜水夫が水中をゆっくり上昇して減圧するように崩壊の衝撃を和らげた」

「彼は軍事力を使って権力を維持するより、改革が進む道を選んだ。91年にエフゲニー・シャポシニコフ国防相が『あなたの命令があればソ連崩壊を阻止する』と伝えた時も『軍事力行使という悪夢を考えることさえできない』と答えた。権力を失うことよりもペレストロイカの将来を案じたからだ。人間の命より重い政治目的などないという理想主義者だった」と振り返った。

「英国には永遠の友も永遠の敵もなく、永遠の利害関係者があるのみ」

マーガレット・サッチャー英首相の側近だったジェフリー・ハウ元外相（故人）は生前、筆者に「84年に訪英したゴルバチョフ氏はサッチャー氏に核軍縮という東西の共通利害に取り組み、冷戦の緊張を打開したいと意欲を示していた」と打ち明けた。このシグナルを受けたサッチャー氏はロナルド・レーガン米大統領に伝え、冷戦終結に邁進する。

当時、ソ連議会代表団長として訪英したゴルバチョフ氏は英南部チェッカーズの首相別邸でサッチャー氏と会談。同席したハウ氏によると、ゴルバチョフ氏は19世紀の大英帝国全盛期のパーマストン英首相の「英国には永遠の友も永遠の敵もなく、永遠の利害関係者があるのみ」という有名な警句を引用した。

次のページ 「今でも何百万人ものロシア人に憎まれている」

1 2 3 次のページ

「何百万人に憎まれている」 ロシア国民と中国は、なぜゴルバチョフが嫌いなのか

2022年09月01日（木）20時27分

「ゴルバチョフ氏は『私たちも同じだ。私たちの仕事は、私たちに共通する利害を特定することだ』とサッチャー氏に伝えた。ゴルバチョフ氏が冷戦の緊張を打開したいと切望しているのはパーマストンの引用からも明らかだった。対内的にはソ連経済の窮状を懸念していた」とハウ氏は振り返った。翌85年ゴルバチョフ氏はソ連指導者に選ばれた。

ジョー・バイデン米大統領は「彼はレーガン米大統領と協力して米ソ両国の核兵器を削減し、核軍拡競争の終結を祈る世界中の人々を安堵させた。グラスノスチ（情報公開）とペレストロイカ、すなわち開放と再編を単なるスローガンとしてではなく、長年にわたり孤立と収奪を強いられてきたソ連の人々が進むべき道として信じた」とその功績を偲んだ。

「ゴルバチョフ氏は今でも何百万人ものロシア人に憎まれている」

米月刊誌アトランティックのトム・ニコルズ記者は「ゴルバチョフ氏の勇気と良識はソ連を救おうとしたことではなく、避けられないことを受け入れるという決断をしたことにある。すべてが失われた時、彼は自分の運命を受け入れた。この決断のために、彼は今でも何百万人ものロシア人に憎まれている」と記している。

英紙インディペンデントのパトリック・コックバーン記者は「ゴルバチョフ氏が予見していなかったのは、軍隊のように運営・組織され、自らのイデオロギーへの信仰によって権力の独占を正当化していたソ連共産党を、他者と権力を共有する社会民主主義政党に似たものに変えることはできないということであった」と指摘している。

ゴルバチョフ氏はソ連共産党指導者としての権力に依拠してペレストロイカを進めようとしたが、逆に党の権威を弱め、自分と改革派の存立基盤を揺るがすことになった。ソ連崩壊のプロセスをつぶさに検証した中国が一番恐れるのは、共産主義というイデオロギーを放棄した後に訪れた体制の崩壊である。

中国共産党系機関紙「人民日報」傘下の「環球時報」は「中国のロシアウォッチャーはゴルバチョフ氏を原則なしに米国と西側に迎合し、国際情勢の判断に重大な誤りを犯し、国内経済秩序に混乱をもたらした悲劇の人物とみなしている。他の国々に対して、西側のいかなる『平和的進化』の試みにも警戒するよう思い起こさせる警告となった」と強調する。

次のページ　ソ連崩壊を教訓に中国共産党支配を強化する習近平氏

前のページ 1 2 3 次のページ

「何百万人に憎まれている」 ロシア国民と中国は、なぜゴルバチョフが嫌いなのか

2022年09月01日（木）20時27分

ソ連崩壊を教訓に中国共産党支配を強化する習近平氏

2013年、中国の指導者になって間もない習近平国家主席は中国共産党幹部に「政治腐敗とイデオロギーの混乱、軍の不忠が崩壊の原因となったソ連の深い教訓に耳を傾けなければならない」と呼びかけた。習氏は「崩壊の理由はソ連の理想と信念が揺らいだからだ。ゴルバチョフ氏の一言で、ソ連共産党は解散を宣言し、消滅した」と語った。

米外交雑誌フォーリン・ポリシーのジェームズ・パーマー副編集長は2016年当時、「ソ連崩壊から25年、中国共産党はこの問題に関して何万もの内部文書、座談会、さらにはドキュメンタリー映画を生み出してきた。しかしゴルバチョフ氏が失脚する前、多くの中国人はゴルバチョフ氏を好意的に受け止めていた」と記している。

ゴルバチョフ氏のペレストロイカより随分早い1978年に鄧小平氏の「改革開放」は始まっている。しかし「中国共産党重慶市委員会書記だった薄熙来氏がクーデターを計画（2012年に失脚）していると中国共産党指導部が考えた。それが習氏登場につながった」と香港最後の総督を務めたクリストファー・パッテン英オックスフォード大学名誉総長は指摘する。

習氏によって中国の「改革開放」路線は180度転換された。自由や民主主義、人権など普遍的価値、市民社会、市場原理を重視する新自由主義、報道の自由という西側の価値はすべて否定された。中国共産党にとって、西側を受け入れるゴルバチョフ氏のような改革派は決して受け入れられないのだ。

それが中国の孤立と衰退を意味するのか、中国共産党支配をより強固なものにするのかは、西側とウクライナが結束してプーチン氏に明確な敗北を突き付けることができるかにかかっている。

前のページ 1 2 3

この筆者のコラム

「何百万人に憎まれている」 ロシア国民と中国は、なぜゴルバチョフが嫌いなのか 2022.09.01

ロシア侵攻から半年　ついに「大規模反攻」の勝負に出たウクライナの狙い 2022.08.31

砲撃戦で逆転したウクライナ　「ブラック・ホーネット」で領土奪還の市街戦に前進か 2022.08.26

「プーチンの頭脳」爆殺の意味　ロシア内部崩壊の予兆か、「非人道」兵器使用の口実作りか？ 2022.08.23

「兵士は家畜扱い」「囚人は生殖器を切られ…」 除隊したロシア兵が明かした戦場の現実 2022.08.19

今や最も恐いのは「狂信」ではない　「悪魔の詩」著者の襲撃事件が問う現代の危機 2022.08.18

クリミア軍用空港「攻撃成功」の真相――これで「戦局」は完全に逆転した 2022.08.13